

1 指定物件の表示及び所有者

指定区分	有形文化財
種別	絵画
指定名称 及び員数	駿岳元甫頂相 1幅
所在地	福岡市博多区御供所町14番4号
所有者	宗教法人 乳峰寺 代表役員 平兮 宗賢

2 概要

品質・形状・銘文等

品質 紙本着色

形状 掛幅装

法量 縦 九八・三cm

横 四〇・三cm

銘文・他 賛・落款・印章

「胡抛乱擲味慕能倒

臥横眠徒曲肱不信

問黄花達磨秋云暮矣

埜盤僧

九白玄菊禅伯画余陋

質請賛一偈以応其

命

永禄九載丙寅仲秋念一

幻住十一世駿岳叟碩甫賛」印章一顆(朱文壺印)

時代 永禄九年(一五六六)

作者 画 不明

賛 駿岳元甫(碩甫)

### 3. 指定理由

承天寺百世駿岳元甫の頂相である。元甫は筑前の人。東福寺、丹波の高源寺で修業し、摂津広嚴寺に出世。永正十二年(1515)、室町幕府 11 代将軍足利義植の公帖をうけ承天寺住持職となった。官寺住持職の任命書である室町将軍のこの公帖は、その折りに上命を下達した筑前国守護大内義興の遵行状とともに承天寺に所蔵されている。のち、享禄三年(1530)、室町幕府 12 代将軍足利義晴の公帖をうけ東福寺の住持職に転位した。義晴の公帖もかつて承天寺に所蔵されていたが現在は所在不明となっている。そののち、承天寺境内に塔頭天得院(天徳院)を開き退隠し、天正三年(1575)に示寂した。『東福寺史』には「八月十六日 承天寺駿岳碩甫寂、壽八十六」とある。

本頂相を所蔵する乳峰寺は、宝治二年(1248)承天寺の三世 寂庵禅師が那珂郡上白水村(現・春日市)に開創した承天寺の末寺であったが、寛永年間その衰微を惜しみ元甫の開いた塔頭天得院(天徳院)と合わせて再興し、現在地に乳峰寺の名が残されたと伝えられる。塔頭ではあるが華嚴山の山号を有するのはその故であるという(『筑前国統風土記附録』)。

本頂相は元甫示寂の九年前、永禄九年(1566)、法嗣の九白玄菊(きゅうはくげんせつ)が画かせた寿像である(九白玄菊は承天寺百一世とも言われるが正確な世代は不明。)九白玄菊はその四年後の元亀元年(1570)、狩野松栄画の「承天寺古図」(市指定)を携え上洛、天龍寺の策彦周良に賛を請うたことで知られる。策彦周良はそれより先天文七年(1538)、遣明副使として聖福寺に滞在、元甫の天徳院を訪れ夜半まで詩句の応酬するなどしばしば駿岳元甫と往来していた(「赴天徳聯筵。孤竹・三英随后。主翁駿岳甫和上發句。」策彦周良『初渡集』)。大内氏の派遣になるこの時の遣明正使は聖福寺百五世・頤賢碩鼎。『初渡集』には策彦周良・頤賢碩鼎(新篁和上)・元甫(天徳和尚)の交流の様が見える。

ちなみに、頤賢碩鼎(湖心碩鼎)は官寺五山派に属さない幻住派であり、「碩」の字を通字とした。駿岳元甫が自賛で「幻住十一世駿岳叟碩甫」と名のっているのは駿岳が幻住派の禅僧であったことを示している(渡邊雄二「乳峰寺・駿岳碩甫像について-幻住なる肖像画の存在-」福岡市博物館研究紀要 第 5 号 1995. 3. 25)。

本頂相は承天寺一山に伝わる頂相では最も古いものであるとともに(福岡県文化会館編『博多承天寺展』1981. 2. 14)、当期の禅寺・禅僧の往来、ひいては中世博多の姿をも窺わせる中世史料として貴重な絵画となっている。



胡拋亂擲味無能倒  
 卧核眠徒曲肱不信  
 問黃花達麼秋云暮矣  
 楚盤僧  
 九白玄菊禪伯登余陋  
 質請贊一偈臣應其  
 命  
 永祿九載丙寅仲秋念一  
 幻住十一世駿音叟頌甫贊

